

# 川崎三郎（紫山）と徳富蘇峰の往復書翰（一）

大谷 正

専修大学文学部教授

## 目次

### はじめに

一 徳富蘇峰宛川崎三郎書翰（以上本号所収）

二 川崎三郎宛徳富蘇峰書翰

三 解説・往復書翰から見た川崎三郎と徳富蘇峰の五〇年を超える交友関係

### はじめに

1

本稿は、徳富蘇峰記念館（公益財団法人徳富蘇峰記念塩崎財団、神奈川県中郡二宮町二宮六〇五）所蔵の、徳富蘇峰宛川崎三郎書翰七七通（うち二通は、同志社大学図書館徳富文庫所蔵の書翰を筆写したもの）と川崎三郎宛徳

富蘇峰書翰一五通を翻刻し、解説を加えて紹介するものである。

蘇峰徳富猪一郎（一八六三―一九五七年）は、明治・大正・昭和を通じて活躍した著名なジャーナリスト・歴史家であり、膨大な量の著作、論説文を残したこと、および桂太郎、山県有朋、松方正義、川上操六などの政軍関係者の伝記を編纂したことが知られている。<sup>①</sup>

一方の紫山川崎三郎（一八六四―一九四三年）も、明治・大正・昭和を通じて活躍したジャーナリスト・歴史家であり、実践面でも活動的なアジア主義者として日韓合邦運動などの政治運動に参加した。そして川崎も膨大な量の著作と論説を残しているにもかかわらず、現在ではまったく忘れ去られてしまっている。<sup>②</sup> その一因として考えられるのは、大正期以降、川崎が蘇峰の企画した伝記編纂事業に中心的なライターとして参加し、さらに昭和期に入ると多忙な蘇峰のために祝辞や碑文の草稿を代筆するようになり、生活の糧も次第に蘇峰に頼るようになったことによるのかもしれない。

かつて高野静子氏が、「川崎は蘇峰の最も信頼した協力者です。」と評されたことが今も筆者の耳に残っているが、それは昭和期の両者の関係を適切に表現したものであろう。<sup>③</sup> 本稿で紹介する蘇峰と紫山の往復書翰は、両者の関係性とその時代的な変化を、一八九〇（明治二三）年から一九四三（昭和一八）年までの五〇年以上の範囲にわたって如実に示していると考えられる。

ここに掲げた写真<sup>④</sup>は、一九四〇（昭和一五）年六月二九日に、銀座中島で行われた青木藤作氏古希祝賀会の写真である。青木は栃木県で肥料商を営む地方実業家で、この頃は蘇峰先生寿康会同人総代として徳富蘇峰を支援していた人物である。<sup>④</sup> 古希祝賀会であるので、中央に羽織り袴姿の青木が座り、その左に洋装の徳富蘇峰が並ぶが、蘇峰の左隣の人物が川崎三郎である。『国史大辞典』や『明治時代史大辞典』（いずれも吉川弘文館から刊行）の「川

3 川崎三郎（紫山）と徳富蘇峰の往復書翰（一）（大谷）

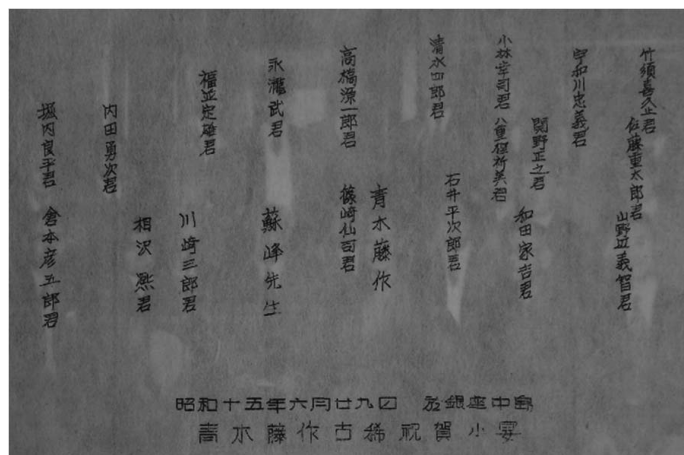


写真1 青木藤作氏古希祝賀会における徳富蘇峰と川崎三郎

前列中央に主賓の和服姿の青木藤作が座る。青木の左側、前列1人置いて徳富蘇峰が、蘇峰の左隣に川崎三郎が座る。（公財）徳富蘇峰記念塩崎財団所蔵。

崎紫山」の項に使われた、中年の精悍な印象のある川崎の写真に較べ、老成した姿である。

本稿の川崎書翰の翻刻に当たって友田昌宏氏のご教示を得た。また漢詩の翻刻と読み下しについては合山林太郎氏のご教示を得た。深く感謝します。但し、翻刻の最終的な判断と責任は著者にあります。

また、徳富蘇峰書翰と川崎三郎書翰の一部を、二〇一九年度前期の大学院演習で使用した。その際に大学院生諸君の発表で筆者の翻刻の誤りを何カ所も訂正することができたことに感謝します。演習参加者は、清水やすし、ジヨヒョンジエ、日岡怜、田中良和の諸氏である。

# 凡例

①書翰は年月日順に配列した。紀年は元号を用い、推定年代には（ ）を付した。年代の推定は徳富蘇峰記念館の推定（丹念に消印の年月日を読み取っている）に従ったが、筆者が推定し直したものもある。

②かな遣いは、紫山の手紙は例外を除くと漢字カタカナ交じり文なので、無理にひらがなに統一せず、原文のままとした。変体仮名や合字は普通体のカタカナとした。蘇峰の手紙も原文もままとした。

③漢字は原則的に常用漢字としたが例外もある。

④原文には句読点はなかったが、適宜句読点を振った。

⑤誤字は修正していない。判読困難な部分は、文字数分の□で示した。

⑥封筒に収められている書翰については、封筒の表書と裏書も翻刻した。封筒などに書き込みがある場合は（ ）を付して注記した。



一 徳富蘇峰宛川崎三郎書翰

1 明治23年3月6日

昨年来ヨリ世界百傑伝編述中ニ有之、第一篇ハ本月上梓ノ筈ニテ已ニ印刷中ニ有之候。甚タ申兼候ヘトモ、右第一篇ノ巻頭ニ老台ノ数言ヲ仰キ度、若シ御了諾トアレハ実ニ野生ノ大幸ニ堪ズ。右第一篇ノ人物ハ、

ジンギス汗鉄木真ノ伝

ビーコンスフキルド候ノ伝

武田信玄ノ伝

釈迦牟尼ノ伝

コロンブスノ伝

ヘーゲルノ伝

老子ノ伝

ニ有之。此編述ノ旨意ハ専ラ未来大人物ト為ルベキ少壮子弟ノ志気才能ヲ發揮セシムルニ有之、可相成ハ大工、大商、航海家等ノモノヲ多クセントスルノ志ニ候ヘトモ、自然ニ政治家兵家等ノ多ク、自ラ素志ニ負クノ憾ナキニ非ズ、次回ヨリ注意ヲ加ヘント欲シ候。又百傑ノ撰定等ニ付キテハ更ニ老台ノ明教ヲ仰キ度候。書外ハ拝晤ニ譲リ、草々如此

小弟 北邨生

六日夕

蘇峯先輩 几下

(世界百傑伝巻一の校正刷り一頁から六頁までが同封されているが略した)

〔封筒表(切手あり)〕 赤坂榎坂町 徳富猪一郎様 親展

〔封筒裏〕 麻布宮村町七十七番地 北邨三郎

2 明治(23)年(3)月11日

阿堵物六星落収セリ。但シ報酬ノ義ハ必ズシモ一々頂戴ニモ及ハズ。奇人俠客最モ喜ブベシ、老僧仙士亦可也、武人亦可也。拜晤ノ上ニテ熟談可仕候。

十一日 北邨生

徳富先生

〔封筒(切手なし)〕 徳富猪一郎様 留置親披

〔封筒裏〕 北邨三郎

3 明治(23)年(3)月14日

貴翰拝誦。学者政治家社会矢野田口諸氏ノ後ニハ、保守黨員歟或ハ奇士俠客流ノ人物最モ妙ナリ。由テ、

高砂浦五郎(最可喜)

市川団十郎

芳野世継

福沢諭吉（最可也）

古沢滋 福地源一郎

諸子中御知己ナラバ、甚申兼候へトモ至急添書願度。尤モ島地子ハ我友人中ニ於テ識ルモノアリ、貴書ヲ煩サズ。

十四日夜 北邨生

蘇峯老台

〔封筒（切手なし）〕 徳富猪一郎様 親展

〔封筒裏〕 北邨三郎 〔川崎 赤鉛筆・蘇峰筆〕

4 明治（23）年（3）月16日（博文館原稿用紙）

舌代草々走筆 十六日夜

海舟翁の談ハ斬新奇抜ナラザリキ、他客ノ為メニ遮ラレタルニ由ル。

今回の演習ハ戦時同様ニシテ最モ大切ナル事ニ付、野生ノ如キ地理若クハ兵律等ニ暗キモノハ、十分予シメ軍勢ノ要領タケヲ心得居ラザレバ盲目通信ノ譏ヲ免レサルニ付、二三有名ノ武人ニ接見シ其兵機ノ大体ヲ質問セントス。

右ニ就キ是非曾我中將ヘノ紹介書相願度。

二十日前後ニハ出発ノ心得ニ付キ、其マテニ百事相整ヒ度ニ依リ、百傑伝ノ序文モ可相成ハ本日中ナリトモ御完稿奉希候。

又曰ク、演習ノ前後余暇ニハ地方知事、紳士、有志家訪問ノ上談話筆記等当ニ応分ノ力ヲ出スベシ。

紫山頑民敬具

蘇峯老兄

曾我中將ノミナラズ其他戰術ニ通達セル將校ニシテ御知己ノ人士有之候ハ、紹介書ヲ願度候。

〔封筒（切手なし）〕 徳富猪一郎様 親展 〔封筒裏〕 北村三郎

5 明治（23）年（3）月21日

本日より孤廬ニ引籠リ兵備上ノ材料精査中ニ有之、少クトモ三日間此ニ従事セザルヲ得ズ。

聞ク海軍ノ運動ハ陸軍ヨリモ先キニ為スベシト云フ、故ニ野生ハ時ニ依リ名古屋ヨリ勢州ニ入り軍艦ニ乗組ムノ心底ニ有之候。如何ニヤ。金四十六円ハ右正に落取セリ。書外ハ出発前尚ホ一会ヲ期シ、艸々此如

廿一日 北邨生

徳富老台侍史

〔封筒（切手なし）〕 東京京橋区日吉町国民新聞社 徳富猪一郎殿 〔封筒裏〕 北村三郎

6 明治24年5月（一）日

明日「忠奸弁」テふ拙稿可差上候。右ハ雑誌ナリ新聞ナリ、掲載取舍唯ダ清裁ニ任ス。

紫山生

蘇峯老台

〔封筒（切手あり）〕 京橋区日吉町国民新聞社ニテ 徳富猪一郎様 原稿

〔封筒裏〕 麻布宮村町七十七番地 北村三郎 川崎（赤鉛筆、蘇峰筆カ）

7 明治24年（ ）月（ ）日

益御清健奉恭賀候。友人艸稿天生女ヲ携へ来リ新紙ノ材料タランコトヲ求ム、貴社新紙ニ於テ御掲載ノ栄ヲ賜ラズヤ。尤モ右艸稿ハ価ノ多少ヲ問フ所ニ非ズト雖トモ同人窮中ニ在リ、幾何ナリトモ思召ヲ以テ可然御取計被下度。艸々如此

紫山俠生

蘇峯老台

新紙企画漸ク成ル、文壇出師日近キニ在リ、紙上ニ於テ左右提携センコトヲ望ム。

〔封筒表（切手なし）〕 国民新聞社にて 蘇峯盟友 親展 紫山生

8 明治24年（ ）月（ ）日

益御清健奉恭賀候。弊社新紙広告の義国民友へ御依頼致候ニ付、十分場所ヲ精撰シ光彩ヲ發揮スル様奉願候。尚次回ノ国民友ニモ広告致度意モ有之候ニ付、その広告ハ人目ヲ聳動スルタケノ意匠可然御取計被下度。艸々

紫山俠生

蘇峯盟友

中西梅花罷出の事ハ跡より返答。

〔封筒（切手なし）〕 川崎三郎（蘇峰筆）

〔封筒裏〕 東京市京橋区加賀町 株式会社国民新聞社 東京市外大森山王 徳富

9 明治24年（ ）月（ ）日

益御清健奉恭賀候。前日御話相成候中西梅花子小説文学担任の事、本社に於テハ已ニ候補者定リ候ニ付、遺憾ノ至ニハ候ヘトモ一応御断ハリ置被下度候。書外万々拝芝ニ譲リ。艸々

紫山生

蘇峯盟友

六日頃マテハ一片の玉稿御恵投ヲ仰ク。

10 明治26年（12）月（ ）日

豊公征韓ヲ点評セル草稿一文アリ、明春国民友紙上ノ余白ヲ借り得ヘキヤ否ヤ、（例ニ仍リ拙劣ナレトモ）。尊著吉田松陰、僭評ヲ試ムヘキニ付、拙价ニ御遣ハシ被下度。

紫山

蘇峯先覚

彈丸小試徒ニ知己ニ負ク

〔封筒（切手なし）〕 国民新聞社 蘇峯盟台 親展

〔封筒裏〕 紫山狂生

11 明治27年7月（一）日

炎熱如燬唯文祉益御清健奉恭賀候。柔穩内閣モ愈開戦ニ決シ候ハ事実ニ有之、故ニ此際辭職勸告ハ御控ヘアリテ可然歟ト存シ候。国民友之停止ハ意外ニ有之、残本アラバ一冊拝読イタシ度。又『天然ト人』新著刷行之上ハ一冊小生宛御恵賜被下度。

紫山生

蘇峯詞兄

〔封筒（切手なし）〕 徳富盟台 親展 川崎生

〔封筒裏〕（印刷） 東京市銀座四丁目九番地 中央新聞社

12 明治29年1月（一）日

御病氣御見舞を兼て吾兄を逗子之養神亭ニ訪れ候処、病ハ何処ヘカ逃げ出したりと見え御帰京候、大慶ニ御座候。逗子ハ大磯ニ比すれば大觀を欠き、鎌倉に比すれば旧蹟無し、然れとも一曲の海灣窮スルカ如ク尽クルカ如ク、特殊ノ風趣ヲ占ムルニ至テハ、最とも妙を覚候。而シテ一樹一砂一水、各其趣アルカ如キ、之ヲ文章ニ比すれば真ニ是れ小品文ト評すへき歟。

逗子の勝ハ世人多クハ之を知らズ、頃日兄之筆ニ由テ江湖ニ知られ候処、今日ハ俗客踵ヲ接シ、憐ハレ天然之別乾坤モ大磯辺之俗乾坤と為んとする傾向あり候。併し是れ老兄ノ罪にハ無御座候。

白砂青松、旧ニ依て知己の觀をなすも、兄あらさるか為め愉快ならず、閑ニ任せて一筆御起居伺迄。草々如此

紫山

蘇峯老兄

昨夜急ニ大磯ニ来ル。只今ヨリ興津ニ遊ヒ明日帰京可仕候也。

〔封筒（切手あり）〕 赤坂区氷川町 徳富猪一郎殿 親展

〔封筒裏〕 川崎紫山

13 明治37年12月（一）日

輪車北走疾催風。野鶴閑雲意氣雄。一路物光看不足。連山白雪夕陽中。  
輕井沢途上所見。

廿一日帝都ヲ発シ、翌日出社、始メテ一文ヲ草シ候。野鶴閑雲、天空海濶、自ラ是レ別乾坤ニ候。

廿三日雪花霜之窓ヲ打ツノ時 紫山

〔官製郵便葉書〕 東京々橋区日吉町国民新聞社 徳富蘇峯盟台

長野市鴻静館 川崎紫山

14 明治38年8月29日

雲箋拝誦、益御清健奉恭賀候。陳者媾和外交之勝敗ハ邦家浮沈之機之ニ繋リ候場合、平生頑鈍迂僻一片憂時慨世之念自ラ禁ズルコト能ハズ候為メ、終ニ議論モ往々矯激ニ涉リ候段々（中途で終わる）

雲箋拝誦、益御清健奉恭賀候。陳者媾和外交之勝敗ハ国家浮沈之機之ニ繋リ候場合、平生憂時慨世之念一片耿自ラ禁ズルコト能ハサルモノアリ、為ニ議論往々ニ矯激ニ涉リ候モノ不少候段、切ニ御賢恕ヲ仰クノ外無之。貴論ノ如



ク万国ヲ相手トスルノ外交、中々局外者ノ主張スルガ如キ議論ノ実行ヲ期ス可カラザルハ勿論ニ可有之。此点ニ付テハ貴紙掲載ノ御高論ニ佩服スル所ニ候得共、何分局外者局内ノ事情ニ曉通セズ候ニ付、切ニ御教訓ヲ煩シ度候。頃日雪鞋氏ヨリノ通信ニ詭激の文字モ有之候得共、今後注意可申上候也。又御海容被下成度。草々不宣

八月廿九日 愚弟川崎

徳富老盟台玉几下

猶懽和問題ニ付テノ内容ニ付テハ御洩シノ程奉希上候。桜哉氏モ近日帰長致候。雪鞋へハ愛山氏ヨリ御注意被下候様相願度候。

〔封筒（切手あり）〕 東京市京橋区日吉町国民新聞社 徳富猪一郎殿 親展

〔封筒裏〕 八月二十九 川崎三郎

15・1 明治（ ）年（ ）月（ 2 ）日<sup>(5)</sup>

野生宛ニテ別紙ノ書面来レリ。右人名番地、吉田喜三郎、深川福住町四番地ナリ。夢談ノ是非全編ヲ窺ハサレハ知リ難シト雖トモ、或ハ一二歴史上ノ参考若シク談柄トモ為ルベキモノ可有之歟。新聞及雑誌ニ於テ掲載スベキ価値アリト知ラバ御取寄候テハ如何ニヤ。只貴見ノ取捨ニ任セ候而已。此の如キ事申来リ候事往々有之却テ蒼蠅。

二日 北邨生

徳富老台侍史

〔封筒（切手なし）〕 国民新聞社ニテ 徳富猪一郎様 親展 □□（赤鉛筆）

〔封筒裏〕 北村三郎

謹啓 弥御勝榮之段奉大賀候。然レハ小生未タ尊顔ヲ拝シ得サルモ、御高説ハ夙ニ承知仕候。扱故人長谷川鉄之進  
 (号強庵) 氏ノ草稿ニ掛ル職掌夢談ト申ス者、小生所持致候。該書ハ今ヲ去ル廿余年前、尊王攘夷ノ説盛ナルニ当  
 リ、専ラ大義名分ヲ唱ヘテ長州侯ニヨリ、次テ三條公外六卿ニ從ヒ長州ニ下リ、將ニ大ニ為ス所アラントシテ果サ  
 ス、空シク大志ヲ西海ニ沈メテ郊野之間ニ遊ヒ候トキ、余ノ家ニ在テ草稿セラレタル者ニシテ、紙数大概三百頁計  
 リ、記事ハ頗ル面白ク且ツ当世之情景ヲ知ルニ足ル者ナリシカ、今此書ヲ貴社ニ投寄シ、以テ世ニ公ニ致サント存  
 シ候ヘ共、議論激烈ナル処モ有之間、或ハ憚リナキニシモ非ラスト存候ヘバ、一応貴覽ヲ煩シ度ト存候。未タ一面  
 識モ無之尊兄ニ対シ、甚タ失礼ニハ有之候ヘ共、何レ其内參館仕候間、万事御教示被下候様偏ニ奉願上候也。謹言  
 北村先生閣下

職掌夢談

大日本 正大公明之狂夫某氏稿

癸亥ノ八月十八日東奥ノ藩賊謀テ砲ヲ 禁闕ニ発シ上下ノ倉皇ニ乗シ戎服ヲ着シ白刃ヲ提ケ自ラ非常警衛ニ託シテ  
 参内シ偽テ不軌ノ徒アリト奏聞シ遂ニ天職ヲ誤リ奉リ(彈正尹中川王及ヒ薩人與ル)(以下略)

〔封筒(切手なし)〕 国民新聞社 徳富猪一郎様 拙稿在中

〔封筒裏〕 麻溪北村三郎

16 明治(一)年(一)月5日

政治社会陽氣ト相成候テ定メテ最多忙ノ事ナリト知ラレ候。此頃早稲田伯ヲ推問致候、若シ御妨無之候ハ、右御

紹介奉願候。旅行ハ少小事情有之暫ク控ヘ居候。時ニ依リ直々出馬センモ不知。例ニ依リ拙稿几下ニ呈ス。

五日 紫山生

蘇峰老台

17 明治（一）年（一）月（一）日

春温微動惟文祉益御雄健奉恭賀候。扨野生友人岡本武、老台ニ接見致度申来候ニ付、御閑隙ノ際御面会被下、且ツ行路ノ方針御指示相成候様奉願候。

書外ハ近日拝芝ニ譲リ、艸々如此

北村三郎

徳富猪一郎様玉榻下

〔封筒（切手なし）〕 国民新聞社ニ於テ 徳富猪一郎様 親展

〔封筒裏〕 托岡本氏 北村三郎

18 明治（一）年（一）月（一）日

昨日無辺居ニ会セシ処、小楠先生ハ王陽明派ノ人物ニ非ズト云ヘリ。果シテ陽明学派ノ人物ニ非ズトセハ野生ノ批評大ニ疎忽極矣。遺稿ヲ閲シ候ヘトモ学派如何等不相見様ニ覚居候。小楠先生ハ朱王ノ如キ学派ニ拘泥セザリシ人物ニ有之候哉、一言ヲ煩ス」時ニ依リ別ニ一評ヲ費サントス。

小弟紫山

蘇峯先覺玉几下

〔封筒（切手なし）〕 徳富猪一郎様 親展

〔封筒裏〕 北村三郎

19 明治（ ）年（ ）月（ ）日

快文拝誦感謝々々、書外ハ渾テ拝芝の日ニ譲る。

紫山

蘇峯盟友

〔封筒（切手なし）〕 徳富猪一郎様 拝答

〔封筒裏〕 北村三郎

20 明治（ ）年（ ）月（ ）日

炎暑之候益御励精奉恭賀候。身上多事ナルカ為ニ未タ山川跋涉ノ途ニ上ラズ。此頃野生ノ書生ニ於テ新聞配達ノ  
勞ヲ致シ、其余暇ヲ以テ学事ニ勉強スルノ志ヲ発シ候。此ニ就キ貴社新紙ニ於テ若シ配達人入用有之歟、欠員有之  
候節ハ、甚タ申兼候ヘトモ右書生御用命ノ程偏ニ奉願候。必ズシモ至急ヲ要スル事ニ非ズ、幸ニ御幹旋ノ程懇請ス。  
書外万縷ハ拝芝。

晩生北村生

徳富先覺几下

〔封筒（切手なし）〕 国民新聞社ニ於テ 徳富猪一郎様 親展

〔封筒裏〕 麻布宮村町 北村三郎

21 大正10年6月18日

謹啓 益御清福奉恭賀候。陳者水戸名産唐木細工、拙宅（水戸）ヨリ尊台へ贈呈スベキ様送付来候ニ付、差上候間御笑納被下成度。此段奉得尊意候也。草々不宣

六月十八日 川崎 拝

蘇峯大人台下

追而御令夫人へモ宜シク御鶴声被下成度候。

〔国民新聞社編輯局封筒（切手なし）〕 赤坂青山南町 徳富老台 親展

22 大正13年2月20日

謹啓 過日ハ失敬仕候。久本氏ノ住所不明ノ為メ回答遷延ノ罪偏ニ御海恕被下度。然ルニ本日同氏ノ住处漸ク分明致候ニ付、直ニ同氏訪問、御旨趣ノ在ル所ヲ御駕可申候間御承知被下度候。草々不一。

二月廿日

〔絵葉書（立原翠軒肖像 渡辺崋山筆）〕 京橋区日吉町国民新聞社 徳富蘇峯様

府下千駄ヶ谷原宿三一七 川崎三郎 拝

23 大正14年3月29日 (上海九華堂詩箋)

謹啓 碑文早速御承諾ヲ得候ニ付、咄嗟走筆供御覧候間、御斧政被下成度、右得尊意候也。

十四年三月廿九日 川崎

蘇峰大人閣下

〔封筒 (切手あり)〕 京橋区日吉町国民新聞社 徳富蘇峯大人玉案下

〔封筒裏〕 府下千駄ヶ谷原宿三二七 川崎三郎

24 大正14年10月13日

謹啓 益御清健奉恭賀候。陳者兼而御依頼に係る橋本景岳伝の儀ニ付テハ、震災後内顧百般不如意運ビ不申候処、此程ニ至リ全部脱稿致候ニ付、両三日中ニ可供御覧候間、宜シク大斧鉞ヲ賜ハリ度。此段奉得尊意候也。

次ニ、震災以前ヨリ先生ノ御揮毫ヲ希望セラレ居候処、御清暇ヲ妨ケンコトヲ慮カリ其伉躊躇致得共、余儀ナキ希依望者モ有之、絹紙数葉並木氏迄差出可致候ニ付、以特別御揮毫被下成度候様、折入而タ希上候。希望者は中島琉球ヲ始トシ、郷里ノ舍弟、並ニ村長其他数名有之。小生ヘモ記念トシテ御揮毫奉希候次第ニ御座候。

十月十三日 川崎 拜

蘇峯大人玉案下

景岳伝モ漸ク脱稿、重荷ヲ晴シタル心地致候ニ付其内、御邸ヘモ一日参上致度存居候。草々不尽。

〔封筒 (切手あり)〕 京橋区日吉町国民新聞社 徳富猪一郎様 親展

〔封筒裏〕 府下千駄ヶ谷原宿三二七 川崎三郎

25 大正15年1月3日

老龍菴訪蘇峯学人不遇、賦此寄懷。

高臥湘南掩柴門 文章海内典型存 欽君報国平生志 史筆私期答 聖恩。

丙寅正月初三 紫山 未定草

〔封筒（切手あり）〕 府下大森山王草堂 徳富猪一郎様 親展

〔封筒裏〕 千駄ヶ谷原宿一七〇 川崎三郎

26 大正15年6月18日（黒龍会出版部用箋）

謹啓 益御清福奉恭賀候。陳者過日参趨ノ節ニハ種々御垂教ヲ辱ウシ、且又「濱々木」一冊御恵投被下成難有奉感謝候。次ニ大塩平八郎ニ関スル藤田東湖の書面ハ見当不申、残念至極ニ奉存候。然ルニ故紙堆裡搜索中ニ大塩洋行ニ関スル左ノ文章一篇ヲ得候ニ付、御参稽の一端トシテ奉呈候。右大塩洋行の説ハ東湖の書面中ニ風評トシテ載セテアリ、東湖ハ大塩ガ平素張子房の人と為リニ私淑し、博浪沙ニ秦始皇ヲ狙撃シ、終ニ跡ヲ韜シタルナドヲ例ニ引キ、其ノ終ル所ヲ知セサルハ子房ニ似タル点ナド、面白シク叙述シツ、アルコトヲ記憶致居候。要スルニ、大塩ノ洋行説ハ秀頼の薩摩藩ト同シク夢ノヤウナ咄ナレド、当時専ラ此如説ガアリシト見エ候。其の内参趨高教ヲ仰キ度樂居候。

一 猶又 尊大人の玉詠有之候ハバ一首ナリトモ御見出シ置被下度候。時下暑威漸加専ラ為勘文御自愛奉祈候。草々不

六月十九日

川崎拜

## 蘇峯大人閣下

嶽父秋篠翁墓表 菱池遺稿（奥並継著）

翁諱昭足。東坊城左馬助諱神足之庶出。冒秋篠氏。居大坂。天保八年丁酉春。大塩平八郎作乱。翁与大塩為姻戚。是以夙与其謀。及敗与大塩父子及其徒十二人。遁于河内。竄土窟中。自尽者七人。乃泛海遁于肥前天草。居歳余。更航入清国。久之大塩父子避跡欧羅巴。翁与其徒三人還于長崎。以医為業。往来於天草島原間。初翁娶天草五稜村長岡氏。生二女。長女已出嫁。翁独与季女居。明治五年壬申。余在熊本鎮台納季女生一男。後翁還大坂。改姓名曰伊藤吉平。十年丁丑十一月十五日病没。享年八十四。葬于城東龍淵寺塋域。二十三年庚寅十月建石表之。

〔黒龍会出版部封筒（切手あり）〕 京橋区加賀町国民新聞社 徳富猪一郎様 親展

〔封筒裏〕 大正十五年六月十八日 東京都麹町区永田町二丁目八十六番地 黒龍会出版部 川崎三郎

27 大正（ ）年 3月16日 （国民新聞社十六字詰八行原稿用紙）

謹啓。幕府ノ制度ニ就テ参考書取調中ニ付、不日起草ニ着手有之候間御承知被下度、目次大綱ハ別紙ニ記述有之候得共、其大綱ニ就テ更ニ細目調査可有之考ニ付是亦得尊意候也。

三月十六日 川崎 拝

蘇峯大人閣下

猶維新史編纂局ノ方ヘモ参考書類問合セ置候。



維新史大綱目次

第一編 孝明天皇前紀

第一章 徳川幕府ノ創立及び其ノ大成

一 家康ト幕府ノ創立

二 家光時代

三 綱吉時代

四 吉宗時代

五 寛政改革ト松平定信

六 天保改革ト水野忠邦

第二章 幕府ノ政治組織

一 幕府ト封建制度

二 幕府ト朝廷トノ關係

三 幕府ト親藩、譜代及び諸侯トノ關係

四 幕府ノ制度

第三章 幕府ノ外交

一 徳川当初ノ開国政策

二 鎖国令ノ勵行

三 露使列撒諾多ノ來航

四 北地問題

五 海防論

六 開国論ト渡辺崋山、高野長英

第四章 尊王論

一 尊王主義ノ学説

二 尊王論ト水戸学

三 竹内式部ノ京都遊説

四 山県大武及ビ藤井右門

五 高山彦九郎及ビ蒲生君平

六 尊王論ト外交トノ關係

第五章 思想及ビ生活

一 文学

二 芸術

三 宗教

四 蘭学

五 風俗

第六章 財政

一 經濟的狀態

二 幕府ト財政

三 財政ト兵備トノ關係

第七章 孝明天皇御即位當時ノ社会

〔国民新聞社編輯局封筒（切手なし）〕 蘇峰大人玉案下 親披 川崎拜

28 大正（ ）年3月28日（国民新聞社十六字詰八行原稿用紙）

謹啓 幕府制度取調候処、左記ノ書目御参考ニ資スベク候得共、精要ヲ得候モノハ小中村博士ノ官制沿革略史及ヒ官職制度沿革史ニ若クモノ無之候。

日本制度通 〔萩野小中村合著〕 三冊

日本制度篇 〔黒川真頼著〕 一冊

制度通 〔伊藤長衛著〕 一冊

武家職官考 〔水本成美著〕 二冊

官職制度考 〔垣塚東華著〕 一冊

官職知要 〔里見安直著〕 一冊

官職制度沿革史 〔小中村清矩〕 一冊

官制沿革略史 〔同上〕 三冊

然ルニ官制ヲ考証スルハ容易ナレド余リニ繁密ニ流レ、乾燥無味ニ陥リ易ク候ニ付執筆ニ苦ミ居候。極メテ大綱文ヲ叙シ、時勢ト關係ヲ保ツベク考究仕候。

三月二十八日 川崎拝具

蘇峯先生玉案下

〔封筒切手なし（国民新聞社封筒使用）〕 蘇峯先生玉案下 親披 川崎拝

29 大正（ ）年12月15日

謹啓 益御清福奉恭賀候。陳者長野県人塚田正夫氏曾テ吉田松陰ノ筆跡ヲ得候ニ付、拝謁ノ上御鑒定ヲ願上度希望ニ候間、何卒御引見ノ上御垂教被下成度。此段奉得尊意候也。

十二月十五日 川崎拝

蘇峯先生玉案下

〔封筒（切手なし）〕 相州逗子老龍庵 蘇峯先生玉案下 親展

〔封筒裏〕 塚田正夫氏紹介 川崎三郎（白木屋特製）

30 昭和2年5月12日

謹啓 新緑可人之候文祉益御清健奉慶賀候。陳者此頃圖書出版会社長谷川美麿氏出資者ト為リ、註釈大日本史刊行会ナルモノヲ計企シ、志類ヲ始メトシ記伝ヲ和訳シ、之ニ註釈ヲ施シ、国史的知識ヲ一般社会ニ普及致度、目下水戸侯爵家ト交渉ヲ開始中ニ有之候。右出版販売之義、同侯爵家ノ承諾ヲ得候ヘハ右註釈ニ従事致候筈ニ付、御垂教ヲ仰キ奉ルコトハ勿論ニ有之候得共、刊行会ニ於テハ是非共監修ノ義ハ台下ニ御願度、野生迄特ニ内話有之候ニ付、其内梨羽男爵同道ニテ参趨仕候間、予シメ得尊意候也。梨羽男爵ハ右刊行会ノ名譽会長タルコトヲ承諾致候。

又大日本史記伝ノ方ハ山路愛山氏已ニ和訳ヲ付シ候得共、志類全部並二年表等ハ和訳シタルモノ無之、洵ニ史界ノ為ニ其欠ヲ補ヒ完璧ト為シ、制度文芸ニ関スル国史的知識ヲ普及セシムルコト急務カト奉存候。委曲拝芝ノ上奉仰御高教候。草々不宣

五月十式日 川崎拝

蘇峯大人閣下

〔封筒（切手あり）〕 府下大森山王草堂 徳富猪一郎様 台啓

〔封筒裏〕 府下千駄ヶ谷原宿一七〇 一三三号 印（川崎三郎）

31 昭和2年9月10日

宿雨快霽文祉益御清祥奉恭賀候。陳者過般得御意候大日本史註釈ノ義愈進行致候ニ付、老齡晩年ノ事業トシテ此ニ没頭スル決心ニテ引受仕候次第ニ付、是非共 閣下ノ御後援ニ由ルニアラサレハ成功モ危マレ候義ニ有之、出版ノ方ハ幸ニ同仁社「昂軒全集刊行ノ出資者」大原孫三郎氏ナルモノ担当シ、註釈ニハ野生ト日本史志表編輯ニ与リ候水戸ノ遺老清水正健氏トニ於テ專任致候得共、大体総顧問格トシテ 閣下ニ願度一同ノ要望ニ付、総監修ノ義切ニ御承引被下成度奉希上候。一兩日中參社可致候間、右奉得尊意候也。

九月十日朝 川崎

蘇峯大人閣下

〔封筒（切手あり）〕 府下大森山王草堂 徳富猪一郎様 親展

〔封筒裏〕 府下千駄ヶ谷原宿一七〇 川崎三郎

32 昭和3年2月9日（同志社大学図書館徳富文庫所蔵）

謹啓益々御清福奉恭賀候。陳者今度内山良平氏主裁ト為リ福岡市ニ於テ東亜産業大博覧会並ニ先哲遺墨展覽開催ニ付御賛助ヲ辱ウシ候処、同氏ヨリ顧問格御承諾被成下候様野生ヘ依頼有之候間、何卒御允諾相成度奉願上候。次ニ先哲遺墨展覽会ヘ御所蔵ノ遺墨二三點御出品被下度、是亦同氏ヨリ願上候ニ付、右奉得尊意候也。何レ兩三日中参趨ノ上御約束ノ白石正一郎日記供貴覽度候ニ付、其節委曲御垂教ヲ仰キ度候。

二月九日 川崎拝

蘇峯先輩玉案下

〔封筒〕 京橋区日吉町国民新聞社 徳富猪一郎様 親展

〔封筒裏〕 千駄ヶ谷原宿一七〇 二二三

33 昭和4年9月7日

冷雨一滴秋涼相催候処筆硯益御清健欣悦ノ至ニ候。陳者月末以來万事一擲筆硯ヲ磨シ候為メ、山公伝モ今ヤ四疆戰爭時代ヨリ薩長聯合時代ヲ経テ、皇政復興時代マデ相進ミ候ニ付、一旦引上ケ帰京ノ上年末迄ニハ第一稿ヲ終リ度覚悟ニ御座候。野生モ年来ノ罪障消滅ノ為メ、最後ノ御奉公トシテ誓テ本伝ヲ完成致度、一日モ念頭ヲ離レ不申候ニ付、何分ニモ御指導ヲ奉仰候。右得尊慮度如此ニ御座候。

九月七日 川崎拝

蘇峯大人閣下

函嶺即事一吟、未成句候得共御一粲二供シ、併而御痛政ヲ仰キ候。

峡雨棧雲秋色多 溪巒依旧自嵯峨 游人不用古関道 又是輕車載夢過。

紫 未定草

蘇峯吟壇玉案下

〔封筒（切手あり）〕 東京府下大森山王草堂 徳富猪一郎様 親展

〔封筒裏〕 相州小田原藤館 川崎三郎

34 昭和（5）年1月25日

謹啓 原稿整理ノ余暇尊稿ヲ拝観シ頗ル羈情ヲ慰シ申候。稿中青年時代ノ作ハ縦横饒意氣、中年以後ハ波瀾老成ノ趣有之間、誤韻ノ処一二箇所相見候ニ付鄙見ヲ付シ置候得共、大体ヲ通シテ間然スル所無之候。其中ニ就テ江漢漫遊ノ作ハ中晩唐ノ佳境ニ入り候様感シ申候。幽燕旅行中ノ作ニ至リテハ彫琢ヲ絶シテ雄健老蒼、元遺山ノ調ヲ帯ビ琅々誦スヘシ、但一二未妥ト感シ候処ニ修正ヲ施シ置候得共、是レ唯御參稽ノ一端ニ供スル迄ニ過キ不申候ニ付、宜シク御取舎被下成度候。

次ニ山公伝第二卷ハ全部脱稿、其整理モ旬日ヲ出デ不申候ニ付、御放念被下成度候。  
時下折角為斯文御自愛專祈ノ至ニ耐ズ候。

一月二十五日 川崎拜

蘇峯大人玉榻下

〔封筒（切手なし）〕 蘇峯老賢台 親展 川崎拝

〔封筒裏（山県有朋公伝記編纂所封筒）〕

35 昭和5年8月19日

攀 蘇峯先生見寄韻賦呈併乞大政。

洗尽征塵醉自寬 蒼茫野色晚凭欄 不須白首愛皎月 翠黛一螺当面看。

紫山 未定草

〔絵葉書・栃木県新那須温泉旅館山楽ノ一部（電話一三番・三八番）〕

栃木県新那須温泉山楽 蘇峯徳富先生玉案下

伊佐野山県公農園 紫山生拝

36 昭和5年11月19日

謹啓 陳者内田氏ヨリ日韓合邦秘史到達致候ニ付差出候間、御一瞥ノ上紙上ニ御紹介被下候ハバ幸甚ノ至ニ候。時

下御自愛ヲ祈候。

廿九日 川崎

蘇峯賢台

〔封筒（切手なし）〕 蘇峯大人玉案下 川崎

〔封筒裏（山県有朋公伝記編纂所封筒）〕 昭和五年十一月十九日



37 昭和6年8月26日

驟雨一陣残暑未退益御清祥奉欣賀候。陳者野生以御蔭山公伝モ其歩ヲ進メ、今ヤ征露戦局時代ヨリ大正政変記ニ筆ヲ染メ候。今後ノ大事記ハ世界大戰ノ潮流ト公ノ公生涯トニ過キ不申、九月下旬迄ニハ公ノ薨去時代ニ及ブヘキ予定ニ候間、何卒御放襟被下成度候。一兩日中ニ仙窟ヲ引弘ヒ帰京可仕候ニ付、拝芝ノ上委曲申上度、為此以寸楮奉得尊慮候。時下折角宝軀御自愛專祈ノ至ニ御座候。

八月二十六日 川崎拜

蘇峯大人玉案下

猶御家族一同ノ万福ヲ祈申候。警察官記念碑ハ草稿出来居候ニ付、帰京ノ上御斧正ヲ乞ヒ可申候。

〔封筒（切手あり）〕 東京市外大森山王草堂 徳富猪一郎様 親展

〔封筒裏〕 豆州熱海西山温泉小西 川崎三郎

38 昭和7年11月18日（同志社大学図書館徳富文庫所蔵）

読東京日日新聞夕刊所載論評、有感テ時事賦一絶呈蘇峯学人、博其一粲併乞大政。

臥榻不容鼾睡催 只当公議俟公裁 慨時濺尽满腔血 百鍊凝為寸鉄来。

昭和七年十一月十八日夜

紫山未定

蘇峯大人閣下

病後切ニ御自愛奉專祈候、拙吟ハ感激ノ余衝口而発候ニ付、其未成句ヲ其俣御叱正ヲ仰キ候。

〔封筒〕 大森区大森山王草堂 徳富猪一郎様 平信 親展

〔封筒裏〕 大森区馬込南千束三四〇 川崎三郎

39 昭和8年6月27日

謹啓 益御清福奉恭賀候。陳者平生荷恩過重ニ拘ラズ、昨日ハ更ニ厚酬ヲ辱ウシ感佩ニ禁不申候。山公伝ノ如キハ固ヨリ先生監修指導ノ下ニ完稿ニ至リ候次第、野生ハ其驥尾ニ付シテ、聊カ驚鈍ヲ竭シタルニ不過候。然ルニ意外ノ過獎ト高恩トヲ辱ウシ慙忍ノ至ニ候。先ツ修寸楮微衷ヲ表シ度候。時下折角御自愛奉專祈候。

六月二十七日 川崎 拝

蘇峯大人閣下

松公伝ハ山公伝ニ比スレハ其生活ニ波瀾ト曲折トニ乏シク、平板的乾燥のニ陥リ易ク、苦心此事ニ候。目下推敲ニ余念ナク再思三思中ニ御座候。

〔封筒（切手あり）〕 大森山王草堂 徳富猪一郎様 親展

〔封筒裏〕 （東京市京橋区銀座西八丁目民友社内 松方正義公伝記編纂委員会封筒）

川崎三郎

40 昭和8年8月22日

謹啓 湖畔ノ高廬御訪問ノ節ハ御芳情ヲ辱ウシ、都門万丈ノ紅塵ヲ一掃シテ帰京仕候。託歴原碑文稿未成章候得共、

何分御雌黄ノ上、宜シク御取舍被下成度候。目下炎熱ニ苦居候次第、併シ松公伝ハ進行中ニ付御安神相成度。御令聞ニモ宜シク御鶴声被下度候。

八月二十二日朝 川崎拝

蘇峯大人閣下

〔封筒（切手あり）〕 甲州山中湖畔別荘 徳富蘇峰先生 親展 保（赤鉛筆で「保」と蘇峰記す）

〔封筒裏〕（東京市京橋区銀座西八丁目民友社内 松方正義公伝記編纂委員会封筒）

緘 川崎三郎

41 昭和9年7月17日

謹啓 梅雨再来之気味ニ候得共、山中湖畔雨中之風情ハ一段ノ趣有之候事ハ想像セラレ候。陳者今回福島東白河郡ノ有志、水郡鉄道「水戸ヨリ郡山ニ通スル鉄道本年十月完成」完成期ニ近キタルヲ機トシ、先輩功労者タル白石義郎氏ヲ想起シ、之ガ記念碑ヲ建設致候計画有之、其ノ撰文ヲ先生ニ願上度、友人金沢春友氏ヨリ懇囑シ来候処、同氏ハ野生年来懇意ノモノニテ固辞シ兼候次第ニ候。此ノ如キ義ヲ以テ先生ヲ煩候事ハ実ニ申上兼候得共、何卒特別ノ誼ヲ以テ御承諾被下候ハバ同地方ノ光榮不過之ト存候。時下折角御自愛專祈ノ至ニ候。

七月十七日早朝 川崎拝

蘇峯老台玉案下

二白 仁藤氏急病ニ罹リ如何ニモ氣ノ毒ノ至ニ候。幸ニ並木氏健在勉強居候ニ付、聊カ人意ヲ強候。

〔封筒（切手あり）〕 山梨県山中湖畔旭丘 徳富猪一郎様 親展 スム9・7・18（9年7月18日に返事済の意

カ)

〔封筒裏〕 東京大森南千束町三四〇 川崎三郎

42 昭和9年8月27日

謹啓 益御清福奉恭賀候。陳者昨日靈泉寺ノ仙境ヲ下リ帰京仕候処、残炎未退苦熱ヲ感候。松公伝中、公ト宮廷重大事件問題ノ關係、公ト清浦内閣トノ關係等ニ付認識不足ノ点アリ、御垂教ヲ煩シ度申居候得共、大体再整理出来居候間御諒承被下成度候。次ニ兼而得御意候水郡鉄道完成記念碑文稿差出候ニ付、御一瞥ノ上八重樫氏ノ許迄御返投奉希上候。

時下折角御自愛千祈万禱候。

八月二十七日 川崎拜

蘇峰先生玉案下

〔封筒（切手あり）〕 山梨県山中湖畔旭カ丘 双宜荘 徳富蘇峯先生 親展 ス 8・28

〔封筒裏〕 東京大森南千束三四〇 川崎三郎

43 昭和10年7月15日

炎熱如燬二候。山中湖畔ノ仙境ヲ想像致候ヘハ真ニ健羨ノ至二候。陳者山野辺氏来社、今度徳川公爵ノ允許ヲ得テ、愈々助川城址ニ記念碑ヲ建設仕度準備ニ着手致処、右碑文ノ義ハ是非共 先生ノ御執筆御願度、御承諾被下候ハ、光栄ノ至ニ御座候。尤碑文ノ義ニ付テハ前年野生起草致居候ニ付、今一応訂正ノ上御潤色ヲ仰キ度存候。

次ニ谷村小林氏ヨリ一報次第峽中ニ赴キ度候。谷村ハ寒村ニ候得共、先生之高風ニ私淑致候もの不慙、蘇峯会支部モ出来候事ト存候。時下折角為邦家御自愛奉專祈候。

七月十五日 川崎 拝

蘇峯賢台玉案下

〔封筒（切手あり）〕 山梨県山中湖畔旭カ丘 双宜荘 徳富蘇峯先生 親展 スム

〔封筒裏〕（東京市京橋区銀座西八丁目九番地）〔民友社内〕 蘇峯会封筒） 昭和十年七月十五日 川崎三郎

44 昭和10年7月16日

謹啓 益御清福奉恭賀候。陳者昨日石井久太郎翁来社、今回山県大式建碑式挙行ニ付、是非共先生ノ祝辞頂戴仕度旨懇請有之候。幸ニ御承諾被下候ハバ、文案ハ野生ニ於テ起草ノ上、福並氏へ御代読致サセ度候ニ付、右奉得尊慮候也。昨日東京ハ九十度以上ニ昇リ、炎熱甚シク相成候。折角御自愛奉切祈候。

七月十六日 川崎 拝

蘇峯賢台玉案下

追白 令夫人へモ宜シク御鶴声被下成度候。月末迄ニハ参上出来申度候。

（建碑実行委員会名簿同封 略）

〔封筒（切手あり）〕 山梨県山中湖畔旭丘双宜荘 徳富蘇峯先生 親展 スム

〔封筒裏（蘇峯会封筒）〕 昭和十七年七月十五（六）日 川崎三郎

45 昭和12年8月29日

残暑如燬候処益御清穆奉恭賀候。陳者戦局モ愈々拡大スルニ随テ国際関係ハ愈々複雑ヲ極メ、東亜大陸ノ前途轉タ寥心ニ堪ヘザルモノ有之候。此際夕刊紙上ノ言論ハ常ニ肯綮ニ中リ、識者ノ注目ヲ惹キ申候。次ニ頃者野生同志ノ先輩等足謀、別紙ノ通り航空殉難者顕彰殿建設ノ企図有之候ニ付、乍御面倒右趣旨ニ御賛成被下度、決シテ御尊名ニ対シ不都合ヲ生シ候事ハ無之候ニ付、御諒承被下度併而申添候。時下折角御自愛奉祈候。

八月二十九日 川崎 拜

蘇峯先生玉案下

追而過日ハ八重樫女史ヨリ潤筆料拝受、乍例御恩意奉感謝候。御令閨ニモ宜シク御鶴声被下度候。

(航空殉難者顕彰殿建設趣意書 内容略)

〔封筒(切手あり)〕 山梨県山中湖畔旭丘双宜荘 徳富蘇峯先生 親展 (ス)

〔封筒裏〕 大森区南千束三四〇 川崎三郎

46 昭和(12)年9月18日

読書黄卷可親之候ト相成、筆硯益御雄健欣慰ノ至ニ候。陳者国史会會員金沢春友氏、今回吉田松陰先生東北漫遊ノ旧路ヲ踏査シ、私費ヲ投シテ留跡ノ碑ヲ建テンコトヲ企テ 先生ノ御揮毫ヲ懇請シ来リ候ニ付、甚々御多忙恐入候得共、「松陰先生留跡処」ノ七字御一筆被下候ハ、独リ同人等ノ喜ノミニ止ラズ、当地方青年ノ志氣ヲ鼓舞スルニ足ルヘシト存候。右御懇請旁奉得尊慮候也。時下折角御自愛是祈候。

九月十八日 川崎 拜

蘇峰老先生玉案下

松陰先生通過之地 留跡処（朱筆）――書

嘉永五年正月廿四日東海岸より白河への途次東白川郡竹貫村に宿泊す 今回この地に前記の建碑を為す。松陰先生自署の「東北遊日記」には竹貫の竹を高貫と書シあるも、高を用ひたる事もあり。

裏面ノ文字

「廿四日（嘉永五年正月廿四日）朝晴、既而雪、離海浜、入山間、両山之間有澗焉、經山田、松川、根岸、齊所諸村宿高貫、乃澗発源処、昨所渡鮫川、即是也、是日經白川菊田兩郡、行程九里」（以上原文）

〔封筒（切手なし）〕 蘇峰老先生玉案下 親展

〔封筒裏〕 川崎三郎

47 昭和（12）年9月22日

謹啓 益御清福奉恭賀候。陳者松陰先生建碑ニ付御揮毫ノ義、早速御承諾被下成感荷ノ至ニ不堪候。金沢氏ヨリ別封用紙到達候ニ付可然御用暇ノ折御願上候。文字ハ再考スルニ

松陰先生游跡処

ノ七字位ニテ宜シキヤニ存候。右御参考マテ申上候。

九月二十二日秋気快霽

南京空爆予定ノ日

川崎 拝

蘇峯賢大人玉案下

松陰先生通過之地〔留跡処〕――書

〔東北遊日誌中の一節 略〕

〔封筒（切手なし）〕 旭丘双宜莊 蘇峯老大人玉案下 親展 川崎 拝

〔封筒裏〕（鳩居堂封筒）

48 昭和13年1月1日

謹而奉祝新禧候。陳者野生頑健、幸二百載一遇ノ好機ニ際シ北支遠征ヲ思立チ、韓国ヨリ新京ヲ經、鄭孝胥ヲ訪問シ、奉天ヨリ天津北京ニ至リ、新政權ノ機構ヲ察シ、旁各地ノ戰跡ヲ一巡シテ歸京致度候。來六日民友社ニ於テ年賀ヲ兼ね拜別ヲ叙シ、而シテ後出發ノ途ニ上リ度、此段奉得尊意候。時下嚴寒折角為國家御自愛是祈候。

追テ御紹介ノ名刺數葉頂戴仕度、併而奉希上候。

戊寅元旦 川崎 拝

蘇峯先覺大人台啓

〔封筒（切手あり）〕 大森区大森山王 徳富蘇峯先生 台啓 保存（赤鉛筆）

〔封筒裏〕 大森区南千束三四〇 川崎三郎



49 （昭和13年2月6日カ）

謹啓 北京ヨリ唐山ニ来リ、冀東ト臨時政權トノ政情ヲ審ニスルコトヲ得候。是ヨリ再ヒ北京ニ入り各方面ヲ訪問スルノ心算ニ候。時下折角御自愛是祈。

唐山ホテル 川崎拝 宇佐拝

〔絵葉書（冀東防共自治政府長官弁公庁与長官）〕 東京大森区大森山王草堂 徳富蘇峰先生 紫山

50 昭和13年9月5日

謹啓 颶風再来東都被害尤甚、山中湖畔高廬ニ侵入相成候や否や関懷ノ至ニ候。過日参訪欠礼仕候、其節得御意候伊藤公遺筆ニ跋シ候未定稿差上候間、其序ノ時ニ御取舍ノ上御一筆ヲ煩シ度奉希上候。都下残炎未退折角御自愛是祈候。

九月初五 弟川崎

蘇峰老賢台玉案下

御令閨ニモ宜シク御鶴声被下度候。

是為伊藤公所贈張香濤書、嗚呼使此言行於當時則清国可無革命之變、而此言之不行豈独清国之不幸而已哉、抑亦東亜之一大不幸也、臨書慨然者久之。未定案

〔封筒（切手あり）〕 山梨県山中湖畔旭丘双宜荘 徳富蘇峰先生台啓

〔封筒裏（川崎個人用封筒）〕 川崎三郎

事務所 東京市京橋区銀座西八民友社

電話銀座(57) 二三〇〇番

自宅 東京市大森区南千束町三四〇

電話荏原(08) 四六六九番

51 昭和13年9月13日

謹啓 題伊藤公書復ノ文字御惠贈ヲ辱ウシ感謝ノ至ニ候。猶都下名家ノ執筆ヲ請ヒ、然後寄送ノ予定ニ候。時下残炎未少減折角御自愛是祈候。

富士山ト老鶴(鶴)ハ好題目、好文字、面白ク拝読仕候。国民史ノ大業モ愈々風雲の文字ト相成候事ト、延首相待居候。草々不一

九月十三 劣弟川崎拝

蘇峰大人閣下

〔封筒(切手あり)〕 山梨県山中湖畔旭丘双宜荘 徳富蘇峰先生台啓

〔封筒裏(川崎個人用封筒)〕 〔赤鉛筆で〕保存 〔彦〕(異筆)

52 昭和14年11月8日

謹啓 益御清福奉恭賀候。陳者御依囑ノ読本分担ノ義漸ク脱稿シ寸間ヲ得候ニ付、京城マテ一寸觀光仕候間右奉得貴意候。

京城着ノ上ハ博文寺ニテ行ハレ候伊藤公追悼祭ニ列シ、併而朴泳孝氏ノ遺族ヲ見舞ノ上、直ニ引返候予定ニ候。金

剛山ノ秋色ヲ賞シ度候得共、其ノ除（余カ）地アルヤ否ヤハ未定ニ候。次ニ栗原氏門人詩碑建立ニ付 先生ノ篆額御揮毫願度同人參上ノ筈ニ付、宜シク奉希上候。

十一月八日 川崎拝

蘇峯先生玉案下

〔赤の版画入り封筒・切手あり〕 大森区大森山山王草堂 蘇峯徳富先生 親展

〔封筒裏〕 大森区南千束三四〇 川崎三郎

53 昭和14年11月15日

謹啓 昨日京城ヨリ平壤著、今朝牡丹台ニ上リ四十余年前ノ戦迹ヲ弔シ感慨係之矣。蒔乃茶屋（お牧の茶屋カ）ニ於テ天下ノ壯觀ヲ極メ此ニ先生ノ健康ヲ祈ル。十一月十五日雪霽好晴

〔絵葉書（平壤、牡丹台）〕 東京市大森区大森山王草堂 徳富蘇峯先生

朝鮮平壤ホテル 川崎三郎

54 昭和（15）年6月19日（鳩居堂便箋）

謹啓 益御清福奉恭賀候。陳者川上大将伝資料蒐集ノ為メ伊東子、菱刈大将始め、志岐、大島、藤井、井戸川諸將軍ヲ訪問仕候得共、如何ニモ材料貧寒ニ付、今一段奔走可致存候ニ付御諒承被下成度候。

次ニ支那ノ同志池宗墨子ガ親日防共ノ急先鋒トシテ各地ニ講演致候論文ヲ訳シ近日上梓ノ運ニ相成候ニ付、題詞トシテ一言御揮毫被下成度奉希上候。右無味乾燥ノ論文ニ候得共、同子ノ希望ニ依リ出版ニ付シ候次第二候。

六月十九日 劣弟 川崎拝

蘇峯先生 玉案下

〔封筒（切手なし）〕 蘇峯先生玉案下 台展 川崎拝

55 昭和15年8月8日

謹啓 益御清福奉恭賀候。陳者言論界萎靡不振ノ際、時々東日夕刊ニ於テ雄渾淋漓ノ議論ヲ拝読、頗ル人意ヲ強ウシ候。川上大将ノ伝ニ就テハ、御依囑以來今日ニ至ルマテ各將軍、各名士ヲ訪問シ資料モ若干手ニ入り申候得共、結局ニ於テ先生ガ將軍薨去當時起草相成候月旦評ノ範圍ニ出ツルコト能ハズ、至急執筆責任ヲ竭シ度苦心慘憺中ニ有之候。但総論ハ先生ノ大筆ヲ煩シ度念願仕候。時下酷熱折角御自愛ヲ祈候。

八月八日 劣弟川崎拝

蘇峯先生玉案下

〔封筒（切手あり）〕 山梨県山中湖畔旭丘双誼莊 徳富蘇峯先生台啓 ス

〔封筒裏〕 東京大森区南千束 川崎三郎

56 昭和15年8月15日

蘇峯大会ノ決議ト先生ノ大演説トハ、時局ニ対シ甚大ナル影響ヲ与ヘタルコトヲ信シ、茲ニ謹テ先生及令夫人ノ万寿ヲ祝シ奉ル。

昭和十五年八月十五日 於三峠水雲山頂上

川崎三郎 小林治郎

〔絵葉書（三つ峠と富士山）〕 甲州山中湖畔旭丘 双誼荘 蘇峯徳富先生玉案下

57 昭和15年11月13日（建国記念事業会野紙）

謹啓 益御清福奉恭賀候。陳者御依嘸之川上大将伝ハ十一月末ニ脱稿ノ予定ニ付、大体終稿ニ相成来月初旬迄ニハ整理ノ上御手許ニ呈シ御覧ニ供シ度候間、御諒察被下成度候。

大日本史訳注執筆中、諸方ニ奔走シ漸ク蒐集シタル史料ニ基キ漸ク成稿致候次第ニ付、完璧ヲ得候事ハ至難中ノ至難ニ候得共、御一瞥ノ上十二分ノ御示教ヲ仰キ度、併而奉得貴意候也。

十一月十三日

川崎拝

蘇峯先生玉案下

〔建国記念事業会用封筒（切手あり）〕 大森区山王草堂 徳富蘇峯先生台啓

58 昭和15年11月22日

謹啓 益御清健奉恭賀候。陳者韓永涉君ハ数年前ヨリ井上角五郎氏等ト与ニ古筠会ヲ組織シ、内鮮一如ノ為ニ尽瘁致居候半島有為ノ青年ニ有之候ニ付、御接見ノ上御垂教被下成度、此段奉得尊慮候也。時下御自愛是祈候。

十一月二十二朝 川崎拝

蘇峯先生玉案下

〔封筒（切手なし）〕 銀座西七民友社 蘇峯徳富先生 親展

〔封筒裏〕（東京市麹町区内幸町二ノ三 幸ビル建国記念事業協会 電話銀座（57）五九四番） 昭和十五年十一月

二二日 川崎三郎拝

59 昭和15年12月12日

窮冬之候益為軍国御尽誠之段日夜感銘仕候。野生儀支那事變以來、日支同志間ニ連絡機関ヲ組織シ意思疎通以上ニ政治的文化的提携ノ基礎ヲ樹立致度、一昨年来不眠不休奔走仕再三再思支那ノ同志トモ協議ヲ重ネ候結果、井戸川將軍ヲ通シテ秦前陸相、東條陸相トノ諒解ヲ得、陸軍情報部長ノ賛同ニ由リ本年ニ至リ既刊雜誌ヲ買収シ、茲ニ明春ヲ俟テ「大東亞」トシテ創刊号ヲ出スコトニ決定仕候次第ニ御座候。

由來非才無能何等國家ニ貢獻スルコトナク候得共、支那事變ハ先生年來主張シ來候東亞問題解決ノ第一著ニ有之、野生ハ先生ノ一翼、否ナ一兵トシテ皇道亞細亞ヲ建設スルヲ以テ最後ノ御奉公ナリト確信シ、國家ノ為ニ老軀ヲ捧ケ度、為此一身一家ヲ顧ミス犠牲ト為ルトモ辞セサル覚悟ニ候間、何卒野生ノ心事御洞察ノ上顧問のニ指導のニ御垂教ヲ仰キ度、敢テ赤心ヲ披瀝シテ今日迄ノ經過ヲ概陳致候。幸ニ御明察ヲ賜ハラバ野生ハ死シテ而シテ悔不申候。時下寥威漸迫、折角為道御自愛ヲ祈上候。

臘月十二朝 川崎 拝

蘇峯先生玉案下

〔封筒（切手あり）〕 大森区山王草堂 徳富蘇峯先生台啓

〔封筒裏〕 大森区南千束三四〇

60 昭和16年1月5日

謹啓 多難ナル新世紀ヲ迎へ奉恭賀新禧候。二日当地ニ来リ、今夜治郎ト与ニ先生ノ放送講演ヲ聴キ雄渾ニシテ莊嚴ナル熱弁ニ感激仕候。所謂之ヲ聴ケハ懦夫モ起ツノ概有之候。聴キ終リテ此書ヲ認メ御健康ヲ祝シ候。

辛巳正月五日夜 川崎拝

蘇峯先生玉案下

兼而申上置候大東亜モ紀元節ヲトシ初号ヲ発刊仕度候。申上兼候得共昨年御講演相成候「興亜ノ将来の食糧」一文初号ニ転載御認容被下候度候。長瀧氏モ常務トシテ努力スルコトニ相成居候。書外拝眉垂教ヲ仰キ候。

〔封筒（切手あり）〕 豆州熱海古屋旅館別邸 徳富蘇峯先生 親展

〔封筒裏〕 甲州谷村小林治郎氏方 川崎三郎

61 昭和17年2月15日

謹啓 益御清健奉恭賀候。陳者豆州小観拝読、御近状ヲ審ニシ欣慰ノ至ニ候。陳者年来御主張ノ大理想実現ニ際シ大東亜建設審議会ニ御就任ノ趣、双手ヲ挙ケテ賛成仕候。時下春寒野生モ風邪ニ触レ候得共今ヤ回復致候。尊体ハ国家ノ宝ナリ、切ニ御愛護ヲ祈上候。

二月十五大雪 川崎拝

蘇峯先生玉案下

次ニ過日徐大使ヨリ御用暇ノ都合ヲ図リ大使館ニ御貴臨願度旨申越候処、熱海御出馬ノ為メ少小猶予ヲ乞置候。御出京ノ機会有之候ハバ尤一回御尊来奉希上候。

〔封筒（切手あり）〕 熱海市清快楼（古屋旅館） 徳富蘇峯先生台啓

〔封筒裏〕 東京大森南千束三四〇 川崎三郎

62 昭和17年5月10日

新緑幽草之時節益御清嘉奉恭賀候。陳者山中湖畔ヨリ御帰京ト存候。兼而得御意候徐大使御高教ヲ仰キ度一日千秋御待上候ニ付、御用暇ヲ期シ大使館ニ御貴臨被下成度、右奉得尊慮候也。

但大使ヨリ尊邸ニ参趨致候モ不苦ト申居候ニ付、併而申添置候。  
何レ一兩日中民友社ニ参上可得御意候得共以寸楮申上候。

五月十日 川崎 拜

蘇峯大人函丈 玉案下

徐大使ハ日滿華一和主義ヲ以テ北支ニ経綸ヲ施シ度念願ニ候。

〔封筒（切手あり）〕 大森区大森山王草堂 徳富蘇峯先生台啓

〔封筒裏〕 大森区南千束三四〇 川崎三郎

63 昭和17年5月16日

謹啓 大使館御案内ノ日取ニ付昨日徐大使ト交渉致候処、御示ノ二八ヨリ三十日ノ間ハ南京政府ノ外交部長褚民誼竝参謀次長一行、日本来訪ノ為公式非公式接待ニ当リ、寛話高教ヲ拝スルニ余裕無之、甚ダ失礼ナカラ来月初旬一行退京後ニ相願度趣ニ有之、来月初旬後徐大使ヨリ改メテ御案内ノ日時取決メ申上クベク候間右奉得御意候也。草々



不宣

五月十六日

川崎 拝

蘇峯老台玉案下

会津籠城記事ハ再三拝読仕り候。右ハ国民教育ノ宝ナリ。

〔封筒（切手あり）〕 大森区大森山王一 蘇峯徳富先生 台啓

〔封筒裏〕 大森区南千束三四〇 川崎三郎

64 昭和（17カ）年6月14日

謹啓 益御清福奉恭賀候。陳者青山会館大講演会近来ニナキ盛会裡ニ行ハレ候事、洵ニ欣賀ノ至ニ候。次ニ過日徐良大使ニ面会致度候処、褚民誼特使一行離京相成候ニ付、兼而得御意候御協議ノ日割ニ付相談有之、同大使ノ希望トシテハ来ル二十日ヨリ一週間ノ内御用暇有之候ハゞ、御貴臨ヲ仰キ度趣ニ有之候。右改メテ御意相伺度両三日中民友社ニ参館致候ニ付、御承知被下度候。

追白 野生健康旧ニ復セズ籠居中失礼甚タ多シ、何奉御寛恕被下度候。時下折角御自愛是祈候。

六月十四日

川崎 拝

蘇峯老先生玉案下

猶徐大使ニハ御都合次第二テ、山王草堂ニ参趨スルモ不苦ト申居候ニ付併而申添候。

〔封筒（切手あり）〕 大森区大森山王一 徳富蘇峯先生 台啓

〔封筒裏〕 大森区南千束三四〇 川崎三郎

65 昭和17年11月20日

秋冷之候御起居如何ニ候哉。仄ニ承候処ニ抛レハ漸次御快癒ニ趨キ候趣、神明ニ祈リテ一日モ速ニ御退院ノ程奉待上候。野生亦宿痼未癒、医師ヨリ絶対的ニ外出ヲ嚴禁セラレ専ラ静養中ニ付御見舞モ出来不申、何卒江海ノ量ヲ以テ御諒承被下成度候。拙什一首未成章候得共御一粲ヲ博シ度、右以寸楮奉得尊意候也。追而御令聞ニモ御鶴声相成度候。

十一月二十日 川崎拝

蘇峯先生 侍曹

当分表記ノ処ニ転地静養中ニ付併而申添候。

〔封筒（切手あり）〕 本郷区帝国大学物療内科医院 蘇峯徳富先生 台啓

〔封筒裏〕 世田谷区大蔵町一五五三 木下氏方 川崎三郎

66 昭和18年2月21日

謹啓 春風料峭台候万福。陳者熱海御静養以来尊体愈々御快癒ニ趨候趣ニ拝察、是レ実ニ天ガ先生ノ修史事業ヲ大成セシムル為メ呵護シ給候事ト信候ニ付、猶一層御撰養ノ程奉祈候。扱今回ハ先生ノ八秩ニ達シタルヲ機トシ、特ニ相澤君ヲ御遣ハシ深厚ナル御見舞ヲ賜ハリ、何辞ヲ以テ御挨拶可致歟、唯感激ノ一念アル而已ニ候。目下野生ハ医師ヨリ外出ヲ嚴禁セラレ居候場合ニ付、右乍失礼以寸楮偏ニ得御海恕度候。草々不一

追記 猶御令聞様ニモ宜シク御鶴声被下度、御慶祝ノ時マテニ回復参列仕度候。

奥羽戦記ハ病中毎朝拝読、仙藩降服始末ニ至リテハ異彩煥発小説ヲ読ムヨリモ興味深キモノアルヲ覺申候。

二月二十一日

川崎 拝

蘇峯徳富先生 玉榻下

〔封筒（切手あり）〕 熱海市古屋旅館清快楼 蘇峯徳富先生 台啓

〔封筒裏〕 東京世田谷区大蔵町一五五三 木下方 川崎三郎 拝

67 昭和18年3月29日

謹啓 野生ガ第一ニ先生ニ感謝セサルヲ得ザルコトハ、病間御見舞ヲ辱ウシ治療代ニ充テ再生ノ恩ヲ受ケ候コト、第二ニ古筠記念会ニ対シ深厚ナル同情ヲ表セラレ田中総監ニ紹介状ヲ賜ハリタルコト、第三ニ我等同人ノ情願ヲ容レ長者江海ノ量ヲ以テ並木氏ノ師門ニ復活ヲ許サレ候コトニ有之候。野生参趨ノ上御礼申上クベク候処、寸歩モ外出不能ニ付、右以寸楮奉得尊慮候也。並木氏復活ニ付御令閨ノ御高配不一方ト存セラ候ニ付、宜シク御鶴声被下度候。

次ニ三月初旬毎日紙上ニ連載相成候玉稿アングロサクソ解剖ノ大論文ハ大東亜戦以来破天荒ノ傑作ト存候。我「大東亜」ニ転載シ大陸購読者ニ頒布致候ニ付、併而奉得御承認候。乱筆草々

三月念九 病褥ニテ 川崎 拝

徳富蘇峯先生 玉案下

同令夫人様

〔封筒（切手あり）〕 熱海市内田旅館楽閑荘 蘇峯徳富先生 台啓 スム（ペン字）

〔封筒裏〕 東京大森区南千束三四〇 川崎三郎 拝

68 昭和（一）年3月16日

謹啓 山海万里無恙御帰朝被遊候段奉恭賀候。陳者東京日々記者福山寿久氏ニ会见致候処、何カ御願アリテ参趣致候趣ニ付、同氏参上ノ節ハ宜シク御垂教被下成度、右奉得尊意候也。

三月十六日 川崎拝

蘇峯大人閣下

山公伝ハ極力起草ヲ急キ、御厚意ノ万一分ニ報ヲ期シ候ニ付、御安心被下度候。

〔山県有朋公伝記編纂所封筒（切手あり）〕 大森山王草堂 徳富蘇峯閣下 親展

〔封筒裏〕 川崎三郎

69 昭和（一）年4月26日

謹啓 尊稿拝読間然スル所無之候。但一二卑見ヲ付シ御参稽ニ供シ候ニ付、宜シク御取舍被下成度。時下折角為斯文折角御自愛、一日モ速ニ御輕快ニ至ランコトヲ熱望ス。

四月廿六日 川崎拝

蘇峯大人玉案下

〔封筒山県有朋公伝記編纂所（切手なし）〕 蘇峯大人玉案下 川崎拝

70 昭和（一）年7月26日

謹啓 近世勤皇家三十傑ノ人選ニ付テハ中々容易ナラズ、慎重銓衡ヲ要シ度候得共原案トシテ左記ノ人物ヲ擬定仕

候ニ付、御高見ノ程御指示被下候ハバ幸甚ノ至ニ候。猶東北ニハ清川八郎ノ如キアリ、薩ニハ有馬新七ノ如キアリ、信州ニハ佐久間象山ノ如キアリ、僧侶ニハ月照ノ如キアリ候共、三十傑ニ限定致候ニ付割愛セサルヲ得ザルモノ不堪候。何分御清海ヲ賜リ度。草々不宣

七月二十六日 川崎拝

蘇峯大人玉案下

時下氣候未順、折角御自愛是祈候。

〔封筒〕 蘇峯先生 親展 川崎拝

〔封筒裏〕（甲州身延山三門前玉屋旅館、甲州下部温泉場内湯下部ホテル、山中湖畔旭ヶ丘こなや旅館封筒）

71 昭和（一）年8月20日

謹啓 益御清健奉恭賀候。陳者過日暑中休暇ヲ利用シ、故山田大夢翁ノ後事ニ関シ片野利三次氏ノ招キニ依リ別府ニ至リ佐賀関ヲ巡覽シ数日滞在、去十六日帰京仕候。片野氏ヨリモ宜シク鶴声有之候。谷村ニ於ケル蘇峯会支部ノ準備相成候ニ付、両三日中出発山莊ニ参趨仕候度。此段奉得尊慮候也。時下折角御自愛奉祈候。

八月二十日 川崎拝

蘇峯賢台玉案下

過日ハ八重樫女史ヨリ漢籍論ニ付潤筆料拝受、乍毎度御厚志ノ段感荷ノ至ニ候。嶽麓独語中ノ論語論ヲ拝読、真是精美玉ノ文字一唱三嘆ニ堪ス候。唯我淺論ノ至ラサルヲ愧ゾル而已ニ御座候。

〔封筒（切手なし）〕 山梨県山中湖畔旭丘双宜莊 徳富蘇峯先生 親展

〔封筒裏〕 東京京橋区銀座民友社 川崎三郎

72 昭和（ ）年 8 月 29 日

謹啓 残暑酷熱之候益御清福奉恭賀候。陳者友人田尻稻里氏ノ編纂ニ係ル贈位諸賢伝二冊、同氏ヨリ特ニ進呈几下致候様依頼相成候ニ付差出候間御落手被下成度。尚又甚々申兼候得共、新刊批評家ノ方へ御垂示ノ上、国民新聞紙上へ御紹介被下候様奉願上候。同氏ハ目下維新史料編纂会囑託ニシテ、水戸家義公全集編纂委員ノ一人ニ有之候。草々不一

八月廿九日 川崎 拝

蘇峯大人閣下

〔封筒（切手なし）〕 国民新聞編輯局 徳富蘇峯大人 親展

〔封筒裏〕 千駄ヶ谷原宿一七〇 川崎三郎

73 昭和（ ）年（ ）月 21 日

謹啓 只今ヨリ谷村迄参り明日午前帰宿ノ予定ニ付、右御承知被下度候。次ニ稿本ハ一閱ヲ経候得共、今夜ヨリ明朝ニカケ再検討ノ上明朝御覧ニ供シ候。草々不宣

二十一日午後三時 川崎 拝

蘇峯先生玉案下

二白 非常ニ優待ヲ辱ウシ感謝ニ不堪候。

「実ニ体裁ヲ根本的ニ変更セザレハ本格的ノモノトナラス 行実トモ 列伝トモ 不成」（異筆 蘇峰カ）

〔封筒（切手なし）〕 蘇峯先生玉案下 川崎拝

〔封筒裏〕（朝鮮総督府鉄道局 急行列車）

74 昭和（一）年（一）月（一）日（山県有朋公伝記編纂所野紙）

謹啓 貴嘱三稿モ草案タケ出来候処、上田翁ノ碑文ニ付テハ左記ノ事項御垂示被下候ハバ好都合ニ有之候。

上山英一郎翁

一 編貫 和歌山県何郡何邑

二 父母

三 年月日

四 教育

五 性格

草稿ハ文脈整理ノ上御清覧ニ供スベシ。

川崎拝

蘇峯大人玉案下

〔封筒（切手なし）〕 蘇峯老賢台 親展 川崎拝

〔封筒裏〕（山県有朋公伝記編纂所封筒）

75 昭和（一）年（一）月（一）日（松方正義公伝記編纂所野紙）

頌德碑

伏惟。允文允武。天皇陛下。承天休以新聖化。龍飛六年之秋。閏六軍於九州之野。其十一月十六日。車駕幸於官幣中社八代宮。以褒彰征西將軍懷良親王及良成親王之忠烈。嗚呼苦節千古。恩露新臻。士民堵列。拜觀盛儀。知先民之芳声不与骨朽。嗚咽感激。頌揚聖德。郡之有志胥謀。嘉蹟建貞珉。予乃撰文係之銘。曰。治不忘乱。前典垂訓。于彰其武。以応元運。文矣夫德。天人感奮。

〔封筒（切手なし）〕 蘇峯老賢台玉案下 川崎拝 八代艸案（異筆 赤鉛筆）

〔封筒裏〕（松方正義公伝記編纂所封筒）

年代不明

76（ ）年（ ）月（ ）日

此頃御帰京文祉益御清健恭賀々々。友人森永判四郎氏、日本新聞記者列伝編纂ノ目的有之材料蒐集中ニ御座候。老兄ニモ御面接致度筈ニ有之、同人ハ誠実ノ士御接見之上同人ノ所見御聴取被下度。書外ハ拝芝ヲ期シ、艸々。

紫山生劣弟

蘇峯老台

77（ ）年（ ）月（ ）日（国民新聞社の封筒に「川崎紫山」と蘇峰の筆で記す）。

春寒日嚴候。惟文祉益御清健奉恭賀候。友人上田將氏、露学ニ長セル者、夙ニ台下之英風ヲ欽シ、拝芝ノ榮ヲ得度趣ニ有之、御延見之上同氏ノ説御聴取アランコトヲ乞、右紹介迄。艸艸不宣



時事匆忙、折角為邦家千万自愛此祈候。

紫山

蘇峯賢台

# 注

（1）宮地正人他編『明治時代史大辞典』第二卷（吉川弘文館、二〇一二年）の「徳富蘇峰」の項参照。

（2）同上『明治時代史大辞典』第一卷（吉川弘文館、二〇一一年）の「川崎紫山」の項参照。なお川崎は徴兵を逃れるため養子となつて、一時北村姓を名乗つた。

（3）高野氏は学芸員として長年にわたり、徳富蘇峰記念館所蔵の書翰の整理にあたられ、書翰の内容に精通しておられる。『蘇峰とその時代』（中央公論社、一九八八年）、『蘇峰とその時代 続』（徳富蘇峰記念館、一九九八年）、『蘇峰への手紙』（藤原書店、二〇一〇年）などの著作がある。

（4）徳富蘇峰記念館HPの人物検索による。

（5）15-1と15-2は同一の封筒に入っていたものであろう。15-2の北村宛吉田書簡に15-1の蘇峰宛北村書簡を添えて、北村（川崎）が蘇峰に「職掌夢談」の掲載について問い合わせた。長谷川鉄之進（一八二一-一八七一年）は越後長岡藩出身の勤王家。